



これまでの歩み、 これからの願い

(子どもの立場)
中野有貴

幼少期から十代の状況

母は、日頃から感情の抑制が
きかず、父と私を罵倒し、思い
込みから隣家に怒鳴り込むな
どの行動を繰り返してしまし
た(後にパーソナリティ障害の
傾向という指摘を受けました)。
父は、私をおいて家を出ました。
母の感情の振幅は激しく、「あ

ただだけが頼りなの」と囁いて
私を抱きしめたかと思うと、急
に「気に入らない、お前のせい
だ」と叫んで私を殴り、家中を
引きずり回しました。母の暴力
は、母自身が疲れ果ててやめる
まで続きました。

また、母は、私が何をしても
否定し、その理由も母の気分や
都合による一方的なものでした。
誰にも相談することができず、
逃げ場はありませんでした。助
けを求める気力さえも奪われて
いくようでした。

こうした生活の中で私は、強
い偏頭痛やめまいに悩み、受診
を望みましたが、母は、「お前が
弱いせいだ。医者にかかるなど
恥だ」と言い、阻止しました。

母との関係の変化

母との関係が変化するきつ
かけのひとつは、私が二十代で事
故に遭い、心理治療を受けたこ
とでした。PTSDの長期にわ
たる治療過程で、家族関係が症
状の悪化と無縁ではないことが
わかりました。また、同じ事故
の被害者の方々やそのご家族と
交流したことも、私が家族関係
を捉え直す大きな支えになりま
した。

回復に向けて日々を重ね、母
との距離をさらにおこうと思っ
た頃、母の行動が深刻化しまし
た。私の職場に誹謗中傷の電話
をかけてきたり、私に仕事に影
響するほどの怪我を負わせたり

しました。家族内での対処に限界を感じました。

それからは、母の状態を客観的に把握するため、役所の生活支援相談、地域包括支援センター、保健所での精神科医による家族相談、病院のアウトリーチ、訪問診療などを利用しました。

途中、私の身の安全と、母の人権への配慮とがせめぎ合う場面が多々あり、幾度も悩みました。結果として、母が地域のサポートを拒み、継続的治療も困難とわかり、私は、母の生活の目途をある程度つけた後、母との関わりを断つ対策をいくつか講じました。私は、心身の一層の回復をめざし、生きるために、

家族関係を解消することを選びました。

仕事の領域での試み

私は現在、教員として、十代から二十代の学生に接しています。授業の中には、病や障害のある人たちとその家族、とりまく社会のありようについて学ぶ、共生社会をテーマとするものがあります。その一環として今後は、限られた時間ではありますが、精神疾患のある親をもつ子どもたちの状況について、学ぶ機会を設けたいと思っています。

私が自分のケースを手本のよう提示することも、誘導することもありません。学生たちが

記事や文献を探して調べ、主体的に学ぶ形をとりたいと考えています。

学生たちには、もし自分が精神疾患の親をもつ子どもの立場ならば、あるいは、これまで出会った人やこれから出会う人がそのような立場ならば、自分は何を思い、どう考えるかという視点から、意見交換してもらおう予定です。

こうした学びが、困難を抱える同世代の子たちに対する気づきに繋がれば、そしてもし、学生の中に困難を抱える子がいたなら、家族との関係を考えたり、学校でサポートを求めたりする糸口してもらえればと願っています。